この第二編第三編の章目を擧げたる所によつても著者が東亜に於ける日本として民屋の觀察を行はんとする壯大なプランと、特異の觀察方向を窺ふに足る。但し各章が殆どいづれも獨立の文章で夫々異る機會に書かれたものであること又單なる記述の範圍をあまり出てゐないこと等尙充分な比較研究の餘地を殘してゐると思はれる。この點については第四編餘錄中に奈良盆地の民屋を論ぜられ、「大和棟は大陸文化の遺物也」と結論されてゐる所に於て著者の比較眼を示してをられる。

全編を通じて極めてヒントに富み、之が礎石となつて建設されるべき日本民屋地理の希望多きを約束してゐる。（菊判一九四頁、昭和十二年十二月、古今書院發行）（野間）

## ○先史地理學研究

小牧實繁著

歴史地理學界に於ける京都帝大地理學教室の傳統と位置とに就いては、今事新しく述べるまでもあるまい。本書は同教室の代表者小牧博士の近業として、氏の到達せられた歴史地理學論の最も新しい段階を詳述せられたものといふべく、此處に地理學の立場よりする歴史地理學の正しき方向の指示を得たことは、われ〳〵歴史學の立場に據るものにとつても大いなる關心事と言はざるを得ない。

本書は第一部「先史地理學の理論」と第二部「先史地理學的研究」の二部よりなり、第一部に於いては、先づ著者の立場が地理學徒として先史地理學を地理學の理論によつて考へ、それを地理學の基礎に立つて理解しようとするものであることを明らかにした後（一、緒論）、地理學が單に人文現象の地盤としての土地を取扱ふもの、或はまた單に自然物としての土地を研究するものではなく、統一的全體としての、景觀の意義に於ける土地・地域を對象とするものであつて、景觀を構成する自然現象・人文現象を景觀に卽して相互關聯的に、統一的全體的に見るべきものであることを明らかにし（二、地理學）、從つて亦歴史地理學は、歴史時代の任意の時の斷面に於ける土地・地域（景觀）の描出を以て理論上の目的となし、而も便宜的には過去の景觀を明らかにすることによつて現在に於ける景觀を研究の對象とする地理學への基礎づけ、背景づけを導く所にその使命を見出すべきことを力說してゐる（三、歴史地理學）。

さてこの歴史地理學の章は著者の最も意を用ひられた所であつて、從來歴史地理學の名目によつて考へられ來たつた所の諸々の學說について批判を加へ、特に歴史の舞臺としての土地の研究、地人の相關卽ち歴史と地理との交渉の研究の如きは寧ろ（地理學者的）歴史家または歴史哲學者の側にまつべきものであるとし、歴史地理學の職能は過去に於ける土地を描出するを以て足り、たゞその描出に當つて人間歴史の發展の過程を見ることが望ましいのみであると論じられたのは傾聽すべきであらう。

しかるに歴史時代の或る時の斷面に於ける土地の描出は、その時を靜態として取上げるか動態として選ぶかによつて異りたる結

果を生む。前者を狹義の歷史地理學、地理的方法による歷史地理學とし、後者を廣義の歷史地理學、歷史的方法による歷史地理學とするならば、後者には古地理學・先史地理學及び狹義の歷史地理學が包括せらるべく、此處に於いて地域史・景觀發達史・地理史等の科學部門との合一が考へられるであらう。しかし地理學の立場よりするならば前者こそ歷史地理學に於ける純正なる方法といふべきであつて、たゞ實踐上に於いて多くの時の斷面に於ける景觀の描出が果たされる結果として、それを集積することにより動的なる景觀の描出も果たされ、かくて歷史地理學に於ける地理的方法と歷史的方法とは究極に於いて相通じ、相合一することとなるべく、それが又歷史地理學の理想であるといふ。且つ亦地理學の使命が現在の世界に於ける景觀の認識を以つて最も重大事とする限りに於いて、現在の景觀の描出が尙その景觀の過去に關する知識なくして完全を期し難い所に、過去の時の斷面に對する歷史地理學の價値が見出されようといふのである。

たゞ此處に於いて紹介者の思ふことは、或る時の斷面として思考せられる時とは如何なるものであらうか、それが瞬間としての時、單位としての時でなく、內に繼續を含む時、時代としての時により近いものとして考へることが、過去の景觀を變化を超越した靜態としてではなく、直接に不變の繼續としての靜態、卽ち動態としての描出からはじめることを許す道ではなからうか。しからずして動態から峻別せられる靜態の集積が、實踐上は動態の描出を果たすと說かれる所には、尙理論上の飛躍がひそんでゐると見える人がありはしないかといふことである。

著者の筆は更に進んで歷史地理學の方法を述べ、先史地理學は先史時代に於ける土地・地域（景觀）を對象とすることを定義し（四、先史地理學）、先史地理學の諸問題に說き及んで幾多の實例を擧げて概說を試みられてゐる（五、先史地理學の諸問題）。第二部は一、越後及羽後海岸平野の研究、二、河內平野の研究、三、出雲平野の研究の三論文よりなり、それ〴〵題記の地域に於ける著者の具體的な研究結果を錄したものである。

卷を閉ぢて思ふことは、先史地理學的研究が先史考古學の一定の成果の上に立つて始めて行はれるが如くに、先史考古學上の研究にも亦先史地理學的觀點を導入することの必要なことである。地理學徒のみならず、考古學徒其他歷史家諸氏にも御精讀をすゝめたいと思ふ所以である。（四六倍版、第一部一二九頁、第二部八五頁、發賣所、內外出版印刷株式會社、定價參圓）（小林）

## ○大和島庄石舞臺の巨石古墳
### ——京都帝國大學文學部考古學研究報告第十四册——

本書は世に周知の京都大學考古學報告書の第十四册にあたるものであつて、而かも大正六年以來ペトリー教授の「組織的考古學」を目標に考古學教室の傳統をこの書の中に育成され來つた濱田博士が直接筆を執つて、其の業績を纏められた最後の書である。この意味に於いて「私自身の關係するこの報告の出版が、本册を以て終結することとなつた事に就いては、私は過去を顧み將來を想